



# Hope Moon Anniversary

～多摩大学 望月ゼミ 20年史～





## 未踏の地への探索と創造の20年

——カタライザーとしてのホープムーン・アカデミーの存在意味——

望月照彦

多摩大学は平成元年に創設された。私も幸いにしてその創設以来の宇宙船多摩大号の乗組員の片隅を占めることが出来た。なにせ、この未知の宇宙船の乗員トップはドッカーナの日本への紹介者・野田一夫であり、ベンチャービジネス概念の生みの親・中村秀一郎であるから、すごいことになった。それまでの大学の常識は全て、社会の非常識であったとして、日々的な大学イノベーションを進めた。学生諸君は大切な顧客として、大学のサービス産業化を徹底させた。それまで当然とされていた休講が一切ない大学、多摩大学に不適切と思える学生には肩たたきをする、地下などにあった学生食堂を最上階の富士山の望める見晴らしのよい場所に設置し、厨房を一流のレストラン企業に任せるなど、まさに常識を破った構想を実現させた。「実際、学際、国際」をコンセプトにして、教員も多くの実務経験者を招聘した。しかし、イノベーションと教育哲学の最大のポイントは、それまでの研究大学を旨とする日本の大学に、学生の教育を第一義とする教育型大学という理念を徹底させたことではないだろうか。近年、例えば東京大学のような一流大学であっても、社会状況を反映したこともあるあってか、就職率が落ち、魅力的な学生が少ないといわれだしている。先生方が研究熱心で自らの名を上げることには血道を上げていても、学生たちへの教育には情熱を欠いているという風潮が、どうも一般論であるがその背景にあるのではないか。むろん、大学の使命は研究にあるが、次なる時代の人材を輩出する機能を失った国家は、滅亡の道を歩まざるを得ないであろう。

多摩大学は、当初からこの教育重視の視点を大切にし、実際にことを進めてきた。その最大のポイントはゼミ教育にあるといつても過言ではない。スタートしての2年後、すなわち2年生が生まれた段階で、基礎ゼミを進める提案が教授会でなされた。3年、4年の本ゼミに先立つ、担当の先生に思い切った構想で進める裁量を託された企画だった。私は先の「実際、学際、国際」という大学教学の

コンセプトを鑑みて、新たな構想を打ち立てた。会社という組織も、グループでの共同作業も、プレゼンテーションいうこともまったく訳も分からぬ学生たちに向かって、私は高々と宣言した。

「望月ゼミは、先生が教壇に立つのではなく、諸君にそこに立ってもらう。そのためには、①ゼミ生諸君でチームを作り、会社を設立する。②その会社に、社会で活躍する起業家や先生が仕事を発注する。③学生会社のメンバーは、その発注課題に対して知恵を集め議論し、企画立案を創り上げる。④各会社は、コンペ方式でその企画立案書を基に、プレゼンテーションを行う。⑤その提案を、厳格な望月ゼミ式評価表で評価し、優勝企業からびりっけつ会社まで明らかにする。

(優勝企業には、発注・出題した起業家からそれぞれの商品等の表彰が行われる)」という宣言であり、学生たちへの提案である。

最初のその提案を聞いて、望月ゼミに入ろうと思って集ってきた学生たちは、騒然とした。無理もないことで、会社とは何か、発注とは何か、組織で思考し、企画をまとめるということは何か、皆目経験も理解もない学生たちには雲をも掴むような話であったであろう。その覚悟はあるかと問い合わせると、教室を埋めていた学生たちの多くがぞろぞろと退室をしていった。ゼミとは、原書購読や有名経済学者の本をテキストにして議論するといったようなイメージを持っていた彼らには、望月ゼミ方式の発想は、異次元の話であったのかもしれない。

しかし、教室には10名程度の学生が残っていた。

私は早速彼らに、来週まで①この残ったメンバーで、気の合いそうな仲間を作り、会社を設立すること。②会社は、名前(企業名は会社の運命を左右する大切な最初の決定事項)を付け、組織を考え、役職を決めること(役職名は既存のものにこだわらない)。③会社の社会的使命・哲学・役割を明示すること。④来週早速、各企業のプレゼンター役に企業プレゼンテーションを行ってもらう、と初の発注を行った。

また、教室は騒然としたが、今度は明らかに明確な意思を持った騒がしさに、私には思えた。

こうして、望月ゼミが始動することとなった。平成2年のことである。

私自身にとっても、手探りのゼミ教育であったが、明確な教育目的と効果への期待があった。それらは、①自分の頭で考える力を持つ。②個人の個性を生かしながら、組織で考えまとめる力を生み出す。③現在社会で起こっている現象や課題を、身近に考える機会を捉える。(社会で活躍している起業家に発注してもらうことで、具体的な問題に触れることが出来る)。④大学の教科書で学ぶのではなく、現実の課題が教科書となり、より実際に即した勉強を自ら行う意思を持つ。⑤組織で問題解決に当たることで、組織内の規律や、日々の社会人と接する上での礼節を学ぶことになる。

こういった教育効果を実際に検証しながら、望月ゼミのチャレンジは展開していった。次の年には、評判を聞きつけて大勢の応募者があった。基礎ゼミは最初は1年間であったが、2年間に広がった。さらに本ゼミを私自身が引き受けるこ

となり、ゼミに入った学生を、都合3年間の面倒を見る機会が生み出された。そこでさらに私が考えたのは、歴史のない多摩大学にとって大切なことは、先輩後輩の繋がりをしっかりと生み出すことであった。普通のゼミ教育は、学年別の学力の差異があるから、別々に行うのが建前であるが、この発注課題は学年が混じてチームを作ったり、先輩がメンターとなって新しい課題を指導したりするという有機的な組織を前提にしたゼミ運営を実践することになった。

こういった考え方方が、実際に大きな効力を發揮するのは、夏休みの合宿である。この合宿は、課題を抱えている地域を選び、その地域に乗り込んでフィールドワークを行い、問題解決や新たな地域経営の提案を、地元の市民や自治体に直接行う。日頃の、会社設立による企画提案、プレゼンという訓練が、大いに実行力を發揮させることが出来る貴重な機会である。これまでに、足利市、桐生市、小布施町、江南町、栃木市、三浦市、鎌倉・逗子などを対象に、実践を積み重ねてきた。

これらのゼミ教育は、試行錯誤の連続であったが、20年に及ぶ経緯の中で、現在の段階でも一定の成果を生み出していると、私は確信している。それは、ゼミOBたちの社会でのそれぞれの活躍を見れば自明のことである。そして、いまや望月ゼミOBを中心にして、自己組織的な一大トライアルが生まれようとしている。本年度が、多摩大学の20周年に当たるが、その20周年を通して生み出されたOBの各学年の代表者たちが、新たなフレキシブルなネットワークを作ろうとしているのである。望月ゼミが生まれた頃から、こういった教育方式が、有機的な仲間作りに寄与してきたのであろう。卒業後も、その実験的、暫定的に作られた会社が、逆に現実の会社組織を超えて、永続的に生きているのである。すなわち、大学を卒業して社会で実働している会社に入っても、大学時代に創り上げたゼミ組織がより強力な心のアイデンティティを持続させる重要な存在になっているのである。

これらの繋がりは、例えばネットコミュニティのようなものよりも、より強力なアイデンティティを持つものとなっているのである。組織論としても、単純な同窓会などを超えた意味性を持つものとなろう。したがって、今回の20周年に創られた「ホープムーン・アカデミー」という組織に、大きな期待が込められているが、これから一体どうなっていくのか、思わず方向に成長していくのか、あるいは消滅してしまうのか、分からぬ。この不可思議な組織に、進化し同時に混迷する社会での新たな役割を期待する以外にないのである。

20年の大学教育を振り返ってみると、私は、ゼミ教育の中心にいたのではない。あくまでも、ゼミ生たちの媒体として存在していたのだと思う。そしてすでに、その媒体がなくても、大きく成長しているOBたちがいる。

彼らが、混迷する日本社会の中で、あのかつてはつらつと学生時代に問題解決のプレゼンテーションをしてくれたように、社会の中で実際に次々提案や解決策を提示し、行動してくれることを願っている。そして、彼らがそのアクティブな行動を起こしてくれる拠点として、このホープムーン・アカデミーそのものが、重要な社会的カタライザ（触媒）になることが、私の切なる希望かもしれない。

# 望月ゼミ 20周年記念事業に際して

～「モチゼミ・プライド」は自己実現そのものである～

ホープムーンアカデミー代表

4期生 白倉正子

多摩大学が創立して、20年。

そして望月ゼミも、20周年を迎えました。

時代の変化に敏感な多摩大学は、小さいメリットを生かしたユニークな経営方針で、大学教育のトップランナーとして、常に社会に問題提議をしてまいりました。

そんな若い多摩大学において、唯一20年間ゼミを続けてきたのは、おそらく望月ゼミしかありません。これは「多摩大プライド」をもって、積極的に新しい文化を脈々と形成してきた伝統だと、自負してもよろしいのではないでしょうか？

それは、時代の変化を瞬時に嗅ぎ取り、常に半歩先を行こうとする望月照彦教授の「本能的なセンス」と、それを面白いと感じ全力を注いだ学生たちの「若い好奇心」と、それを応援して下さった審査員や発注者の方々の「暖かい支援」との、絶妙なコラボレーションで実現したのだと思うと、今さらながら、感謝と感動の思いで、胸が熱くなります。

繰り返すまでも無く、この望月ゼミは「実社会からの発注を想定して、立案した企画を、プレゼンテーションする」という斬新なスタイルを貫いてきました。時には実社会では思いつかないようなユニークなアイディアやパフォーマンスが登場しましたが、私はここに学ぶ面白さ、つまり「教育の真髓」があるように思います。なぜなら、偏差値教育に代表される詰め込み型教育や、知識修練が難しかったゆとり教育から取りこぼされてしまった「創造する面白さ」を、リアリティをもって体感できるからです。

言い換れば「自分が社会に何をプレゼンテーションしたいのか？」を考える教育であり、結果的にそれは自らの生き方を探すこと、つまり「自己実現」につながると、私は強く感じます。なぜなら、ありきたりの就職活動をして、平凡なサラリーマンになるのではなく、自分の能力と個性を存分に發揮できる人生を、自ら作り出せる構想力と行動力が身に付いたと、自らの体験をもって証明できるからです。私はこれを望月ゼミのプライド=「モチゼミ・プライド」と命名し、一生心に刻み込みたいと思います。

ところで、この度の20周年では、40代の大先輩から10代の現役学生までが手を取り合い、3本の記念事業を行って参りました。それは①20周年記念誌（本書）の発行、②記念祝賀会の開催（2009年10月17日品川にて）、③OB会「ホープムーンアカデミー」の新体制の確立です。

会員が360名になる現在、今後もこの勢いを大事にし、会員同士がお互いの向上につながるような、自由で・創造的で・刺激的な、望月ゼミらしい同窓会を運営してまいりたいと思います。

どうぞ、よろしくお願ひいたします。

# History of HMA / 20 年の軌跡

年度	入ゼミ	在籍次期	基礎／本ゼミ
1989	平成元年	1期	
1990	平成2年	2期	基礎ゼミ（1年次）
1991	平成3年	3期	基礎ゼミ（1、2年次）
1992	平成4年	4期	基礎ゼミ（1、2年次）
1993	平成5年		基礎ゼミ（2年次）
1994	平成6年	5期	基礎ゼミ（2年次）
1995	平成7年	6期	基礎ゼミ（2年次）
1996	平成8年	7期	基礎ゼミ（2年次）
1997	平成9年	8期	基礎ゼミ（2年次）
1998	平成10年	9期	本ゼミ（2年次）
1999	平成11年	10期	本ゼミ（2、3年次）
2000	平成12年	11期	本ゼミ（2～4年次）
2001	平成13年	12期	本ゼミ（2～4年次）
2002	平成14年	13期	本ゼミ（2～4年次）
2003	平成15年	14期	本ゼミ（2～4年次）
2004	平成16年	15期	本ゼミ（2～4年次）
2005	平成17年	16期	本ゼミ（2～4年次）
2006	平成18年	17期	本ゼミ（2～4年次）
2007	平成19年	18期	本ゼミ（2～4年次）
2008	平成20年	19期	本ゼミ（2～4年次）
2009	平成21年	20期	本ゼミ（2～4年次）

OB会	合宿	文化祭	学長	多摩大学史 / 備考
			野田一夫	多摩大学開学、総合研究所開設
			野田一夫	
			野田一夫	
			野田一夫	後藤久美子（当時のアイドル）と同期
		プレゼン大会（小田急を救え！？）	野田一夫	
		大学祭記念オープンフレゼン大会（都市の牧神たちは、“にらいかない”に添着できるか）	野田一夫	大学院修士課程設置
		坂本竜馬がパーソナルメディアを持つとしたら 学園祭オープンフレゼン大会	中村秀一郎／グレゴリークラーク	経営基礎・情報基礎の授業開始
		サステナブル・コミュニティ（自給自足の社会）	グレゴリークラーク	
		世界にはばたく、"ヤング・アントレプレナー"を生み出す多摩大学のスーパーシステムを提案する	グレゴリークラーク	
			グレゴリークラーク	
		第12回多摩大学雲雀祭2・3年共同企画 「多摩大学ファイトクラブ！～1万円で利益をあげる会社～」	グレゴリークラーク	
			グレゴリークラーク	
	足利	プレゼンテーション大会 「多摩大を活性化するには」	グレゴリークラーク／中谷巖	渋谷マークシティWEST17階にルネッサンスセンター開設
第1回渋谷	足利・桐生	プレゼンテーション学会／模擬店	中谷巖	自己発見、イングリッシュシャワー開始
第2回渋谷	小布施	市村社長講演会	中谷巖	
第3回品川	野田	ゼミ対抗プレゼン（望月ゼミ優勝） 望月ゼミが生み出した若き起業家群像	中谷巖	品川インターナショナルタワーA棟27階にルネッサンスセンター移転
第4回品川	笠間 栃木（栃木市）	自主製作映画ゴットバビー上映	中谷巖	
第5回品川	埼玉（江南町）	ショートフィルム上映	中谷巖	経営情報学部マネジメントデザイン学科新設
第6回品川	栃木（那須烏山）	ファッションショー	中谷巖	
第7回多摩	三浦		野田一夫 (代行)	
第8回多摩	湘南	湘南ブランド	寺島寅郎	

**【寄稿者】**

望月照彦 犬塚潤一郎 塚原正彦 望月香菜  
小島幸博 鈴木崇 鈴木信夫 白倉正子  
泉大五郎 増島清人 遠井利夫 斎藤正弘  
中田将来 かもがわみき 矢部智也 三宅スパイク亮暢  
奥村泰夫

**【編纂協力および素材提供】**

伊藤裕史 小島幸博 鈴木崇 五十嵐修 白倉正子 奥村泰夫  
高垣邦彦 浅原長将 吉平直弘 住中真史 吉野健史 針山愛子  
片倉嵩敬 増島清人 遠井利夫 青柳知佳 小野徹 横谷龍彦  
平野智子 小松尚 佐藤擁 田貝桂 中嶋哲郎 中島慶太  
三宅亮暢 黒澤雄 青木裕太 西條貴規 富士道惇 佐々木健一  
鈴木信夫 吉川啓一郎 千葉亜紀 森分未希世 神原美歩 島尻剛  
多摩大学学長室

(敬称略、順不同)

---

## Hope Moon Anniversary

～多摩大学 望月ゼミ 20年史～

---

2009年10月17日 発行

発行人 白倉正子（ホープムーンアカデミー代表）  
事務局 ☎ 240-0032  
神奈川県横浜市保土ヶ谷区法泉 2-26-23-304（白倉方）  
TEL&FAX 045-351-5493  
MAIL hma-all-owner@yahoo-groups.jp  
編集人 鶴川美紀  
編集委員 鈴木崇 平野智子 中島慶太 中嶋哲郎  
佐藤擁 小島幸博 奥村泰夫 高垣邦彦 横谷龍彦  
Art Direction 室井晃  
Special Thanks 多摩大学同窓会  
印刷 株式会社 ポブルス

---

© 2009 Hope Moon Academy.

Printed in Japan.